

聖マリア国際協力ニュース

第 114 号

平成 22 年 2 月 1 日発行

国際緊急援助隊医療チーム (JMTDR) 中級研修に参加して

薬剤部 北 茜

私は以前、社会に対して自分がどんな役割を果たせるのかを漠然と考えていた時期があり、その頃目に入ってきた情報の一つに「青年海外協力隊」の活動がありました。その説明会へ参加して、世界には様々な問題を抱えている国が沢山あり、年齢、職業を問わず、日本から多くの人々がそれを助けるために貢献している現場があることを知りました。その事に感銘を受け、私も活動に参加したいと考えるようになりました。その頃は実務経験がまだ無かったので薬剤師という職種を生かした活動の応募は出来ず、途上国特有の感染症を予防するための活動といった、資格無しでも関わることができる活動に応募する事になりました。残念ながら派遣とはならなかったのですが、海外ボランティアに対する思いは依然持ち続けていた頃、聖マリア病院に国際協力部があることを知り、今度は職種を活かした活動への参加の可能性も広がるかもしれないという思いもあって当院への就職を希望しました。入職後、当院で JMTDR 導入研修を受ける機会があり、登録メンバーとなって以来、中級研修への参加をさせて頂いています。

海外への派遣経験のある医師、看護師、技師の方々も受講されており、他職種の方が携わる活動へも関心を持ち、積極的に知識を得ようとする意識の高さを目の当たりにしました。このような面でも大変勉強になる研修でした。携行薬剤における拡充の検討の講義では、今後のミッションで手術・透析・病棟活動を行う時に必要となる薬剤についての検討を行い、JMTDR に期待されている活動の幅広さを感じました。

「栄養」の講義では被災地で胎児、3歳までの子供、妊婦、授乳婦、高齢者といった人々の多くが栄養障害を抱えており WFP (国連世界食糧計画) 主導で栄養プログラムが行われている事を知ることができました。栄養についてはその重要性をあまり認識していませんでしたが、緊急時における簡易栄養アセスメントとして行うキャリパーやメジャーを用いる身体計測によって、実に多くの情報が得られる事を知り、またその情報が後の食糧支援活動に役立てられていくという事を学びました。こうした点から、幅広い分野の基本的知識を身に付ける事の必要性も認識しました。

「災害地での活動も”患者さんのために”という意味では、日頃の業務と何も変わりはありません。今後とも研修を通して災害医療に対する知識をさらに深めるとともに、当院での業務に一層励むことで、社会に貢献してゆきたいと考えております。

※2枚の写真はいずれも JICA より提供。



「栄養」の講義での実習風景



スディピアで訪れた洞窟

(※左頁より続く) 夕食時には「キンカオ ナムカン (一緒にご飯食べよう)」と声をかけてくれたり、雨が降れば洗濯物を取り入れてくれたり、留守時には家の隅々まで掃除してくれていた。時には帰宅や戸締りが遅くなると注意してくれたりもします。日本の大家と借主の関係からは想像もつかないようなことばかりで、驚きの連続ですが、私の家は代々日本人が入居してきたため、これでもある程度の距離を保って接しているようです。干渉されることが嫌な方には少々辛

い環境かもしれませんが、私はラオスの家族ができて来て、彼らの中で心地よく過ごしています。来月には大家の姪っ子で向かいに住んでいるシンちゃんが出産を控えており、妊娠当初から日に日に大きくなるお腹を見守ってきた私は、新しい家族が増えることに今からワクワクしています。無事に元気な赤ちゃんが生まれることを願うばかりです。

このように、平凡な日々小さな幸せをたくさん見出しながら、どっぷりラオスに浸った生活を送っています。ぜひスタディーツアーなどを通して、皆様にもラオスの大自然やあたたかい人々の心に触れ、ラオスを好きになってもらえればと思っています。皆様の訪問を心待ちにしております。

JICA 地域別研修「南東欧地域医療施設運営」コース開始

国際事業部 矢山 進一

貴重な国際交流の機会ですので、興味をお持ちの方はぜひご参加ください。



開講式後の集合写真

旧ユーゴ独立国のセルビア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナにおいては、これまで復興支援として無償資金協力を通じた多くの医療機材整備支援が実施されてきました。しかし現地では病院管理という概念が浸透

しておらず、医療機材の維持管理費など重要なコストに対するプライオリティが低くつけられる傾向があり、結果として、せっかく供与された機材が有効活用されていないのが現状です。このことからハード面の整備だけでなく、限られた資源を効率的に活用するための病院運営・財務管理が現在必要とされています。

そこで JICA (国際協力機構) は、病院運営に必要な情報収集とその活用についてのノウハウ習得を目指した集団研修の実施を当院に委託し、平成 18 年度から 20 年度までの 3 年間「南東欧地域 病院運営」コースが実施されました。



1 Mr. Mirko



2 Mr. Vlado



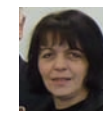
3 Mr. Miroslav



4 Mr. Dusko



5 Mr. Dragan



6 Ms. Sladana



7 Ms. Tatjana



8 Mr. Slobodan



研修員たちの出身国
 *ボスニア・ヘルツェゴビナ (水色)
 上記 1 ~ 4 の研修員の出身国
 *セルビア (赤色)
 上記 5, 6 の研修員の出身国
 *マケドニア (黄色)
 上記 7, 8 の研修員の出身国



中級研修の開会式

薬剤を活用しながら、いかに現地の問題に対応していくかという内容が中心の講義でした。薬剤師のみならず、

今回の研修は「薬物治療」隊員携行薬剤について、薬剤の現地調達→廃棄について、また特殊疾患における使用医薬品 (マラリア・赤痢等感染症治療薬) についてなど、より具体的な事例に基づき、限りある携行

ラオスでの日常を振り返って

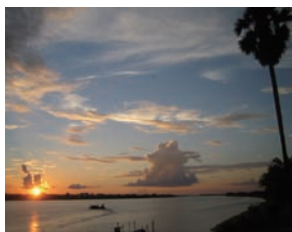
NPO 法人 ISAPH 藤倉 友

NPO 法人 ISAPH ラオス事務所の藤倉と申します。私は以前から大学院で学んだ国際医療保健に係わる仕事に就きたいという希望があり、昨年 4 月、ラオスで保健医療の向上を目指して活動をしている ISAPH へ就職しました。ラオスに赴任して早くも 10ヶ月が過ぎようとしています。初めは言葉が全く分からないことで大変もどかしい日々が続いていましたが、1年近く経った今、ようやく落ち着いて生活できるようになりました。

ISAPH ラオス事務所があるカムアン県タケーク市は、これといった娯楽は何もない所ですが (スタディーツアーや研修などで来たことがある方は頷けると思います)、アジアの「母なる大河」と言われるメコン河に沿って位置しており、壮大な自然と共に生活を送っています。特にメコン河に沈む夕日は格別で、見るたびに違った景色を楽しむことができ、心と時間を過ごすことができます。また、ベトナムの方向に少し足を運べば、桂林

を連想する変わった形の山々が連なり、大小の洞窟がたくさん点在しています。涼しい洞窟はラオス人にとっても恰好の観光地のように、休日にはピクニックに来ている姿を多く見かけます。

ラオスに住んで日頃感じることは、人と人とのつながりが強く、絆をとっても大切にする文化が色濃くあることです。私の住む家は大家の家族・親戚宅に囲まれており、本当にラオス人の中で生活しているため、余計にそう感じるのかもしれませんが。
 ※ (右頁へ続く)



メコン河に沈む夕日

交流会開催のお知らせ

JICA 地域別研修「南東欧地域医療施設運営」コースの研修員と病院職員との交流会を下記のように開催します。貴重な国際交流の機会ですので、興味がある方はぜひご参加ください。

1. 日時: 平成 22 年 2 月 10 日 (水) 18:30 より
2. 会場: マリアンハウス II ラウンジ
3. 問い合わせ先: 国際事業部 (内線 2385)

今月の動き

【受入】
 ・2月26日(金)~3月5日(金)
 韓国カトリック医療協会 (技師グループ) 研修を実施。6名が臨床放射線室、臨床検査室、薬剤科、栄養指導管理室にて見学研修。

